早稲田大学大学院日本語教育研究科

修　士　論　文　概　要　書

論　文　題　目

日本語ボランティアに望まれる「態度」養成についての一考察

寺井　敦子

2023 年 9 月

第１章　序論

本研究は、平成 31 年(2019 年)に文化審議会国語分科会によって提示された「日本語教育人材の養成・研修の在り方について(報告)」改訂版(以下:「報告書」)の日本語学習支援者に望まれる「資質・能力」で分類された、３つの「知識」「技能」「態度」項目のうち、とりわけ「態度」に着目する。「態度」に着目する理由を述べる。この「報告書」において、日本語ボランティアは、日本語教師やコーディネーターの「補助的な役割」(松岡 2018, p. 73)が前提条件である。しかしながら、地域の日本語教室の現状は、コーディネーターや有資格者である日本語教師の人材が不足している。前提条件が満たされていない多くの現場では、知識と技能不足を感じる日本語ボランティア(森本 2001, 森本・服部 2011, 米勢 2006)に一層の負担をかけることになりかねない。では、日本語ボランティアが、項目にある「知識」や「技能」に捕らわれすぎることなく、3 つ目の「態度」項目を、どのように捉え、多様な文化背景を持つ参加者にどのように関わっていくのが望ましいのであろうか。筆者はこれを研究目的とし、日本語ボランティアの具体的な態度を調査、分析することにより、ボランティアが主体的に日本語支援活動を行うための示唆を得たいと考えた。

第 1 章では、本研究の概要(1. 2)を述べた後、地域日本語教育の歴史的背景を説明した(1. 3)。地域日本語教育は今日まで、社会の動向と連動して展開してきたのであり(池上 2007, p. 106)、そこには貢献的なボランティアの存在がある。次に地域日本語教育におけるボランタリズムについて述べた(1. 4)。1990 年代以降、ボランタリズムの議論は、大きく変化している。西山(2005)は、ボランティア活動を、行政の補完や宗教的理念や動機付けで規定するのではなく、ボランティア活動における他者との相互関係を形成するプロセスを解明し、新たな公共性がどのように切り開かれるのかという理論的課題の検討を投げかけている(p. 19)。筆者は、地域日本語教育の分野においても、日本語ボランティアが、今後増加が見込まれている多様な背景を持つ在留外国人のニーズに合った、地域それぞれの支援の型を模索し、主体的に実践していくことにより、国家や行政の次元ではなく、市民レベルにおける新しい公共性を生み出す担い手になり得ると考える。

第２章　先行研究

第 2 章では最初に、先行研究における地域日本語教育に対するさまざまな議論について検討した(2. 1)。特に多文化共生の理念から導きだされた地域日本語教育の役割が、

実際の日本語ボランティアの活動現場では、十全に果たされていないという問題をあげた。また、筆者が所属するNPOの日本語支援グループのボランティアたちが、「教える-教えられる」学校型日本語教室を展開していることや、彼らが知識と技能に関する能力不足に問題意識をもっているという現状も、研究者たちが批判していた点(森本2001,森本・服部2011,米勢2006)と重なりがあったことを指摘した。筆者は、日本語ボランティアと外国人参加者が、一見「教える-教えられる」関係性であったとしても、結果的にはそれは双方向的な関係性を生み出すことが可能であること、活動主体である日本語ボランティアが、日本語支援活動の意義や目標をもち、常に社会的文脈を捉えながら、ことばを通して場を主体的に創り出していくことが大切だと述べた。

続いて、日本語教育政策について検討した(2.2)。本研究では、文化審議会国語分科会(2019年)の「日本語教育人材の養成・研修の在り方について(報告)」改訂版(以下:「報告書」)で提示された日本語学習支援者に望まれる「資質・能力」について注目した。筆者は、文化庁が示した日本語学習支援者に望まれる「資質・能力」は、2008年の日本語教育学会による「地域日本語教育システム」における日本語ボランティアの位置付けと比較すると、より「知識」と「技能」を要するものに方向転換されたものになったが、それを実現するためのインフラ整備が不十分であることを指摘した。一方、筆者はこの「報告書」で提示された「態度」項目に着目した。「２１世紀型スキル」にも挙げられているように、今後ますます多様化が進む社会で、知識や技能以上に、「相手の視点に立って考えたり、共感したりする」社会情動的スキルや、態度及び価値観がこれまで以上に重要になる(白井2020,p.139) からである。「報告書」にある日本語学習支援者に望まれる「態度」項目は、いずれも抽象的で、視覚的に評価・測定可能なものではない。そのため、豊かな経験を持つ日本語ボランティアの態度を調査し、最終的に「報告書」の「態度」項目の具体例となり得るか検討したいとした。尚、本研究では、「態度」を、Allport(1935)の「経験を通じて体制化された精神的、神経的な準備状態」という定義を援用し、個人の経験から涵養された価値観や信念から形成されたものであるとする。

第３章　研究内容

3.1　研究課題

本研究の目的は、「日本語ボランティアが主体的なボランタリズムを発揮しながら、多様な文化背景を持つ参加者に対し、どのように関わっていくのが望ましいのか」を明らか

にすることである。そのために、経験豊かなボランティアが日本語支援活動において、どのような意義をもち、態度を示しているかを調査の目的とし、以下の３つのリサーチクエスチョンを設定した。

RQ1	日本語ボランティアは、どのようなボランティア観をもって活動しているのか。
RQ2	日本語ボランティアは、ボランティア観をどのような経験から醸成したのか。
RQ3	日本語ボランティアは、実際の活動において、どのように参加者と関わっているのか。

3.2　研究方法

本研究では、調査対象者であるＳさんが、人生におけるこれまでの経験をどのように意味づけし、それをどう変容させ、どのような態度を醸成したのかをライフストーリーアプローチによって明らかにしたいと考えた。日本語ボランティアの主体的な態度というものは、人生経験から涵養された価値観が大きく関わってくると考えられることを筆者の構えとし、現場で実践している日本語ボランティアの「個の声」(パーソナル・ストーリー)に耳を傾けることで、政策が示した地域日本語教育の日本語学習支援者に望まれる姿(モデルストーリー)を問い直したいと考えた。

3.3 調査概要

調査概要を説明する。第１の調査として、NPO に所属する、日本語ボランティア５名に、質問紙調査を行った。調査の目的は、二つある。一つは、RQ①に答えるためである。日頃より、教室活動の内容は、それぞれの日本語ボランティアに任されており、情報共有する機会も少ないため、彼らが現在行っている日本語支援活動への参加動機や意義、抱えている課題をまず把握し、解釈を試みた。もう一つは質問紙調査の結果から、第２の調査であるライフストーリーインタビューを行う対象１名を選ぶことである。ライフストーリーインタビューでは、RQ②を明らかにするため、調査対象者のこれまでの異文化経験や、日本語支援活動から、ボランティア観がどのように醸成されたか、そのプロセスや日本語支援活動への意味付けを考察した。第３の調査は、ライフストーリーインタビューから得た態度データをもとに、支援活動現場への参与観察を通じて、調査対象者が参加者とのやりとりにおいて、どのような認知的・非認知的態度を示しているかを、調査した。

第４章　質問用紙調査

Google forms を使用した質問紙調査の考察結果(4.3)より、調査協力者の５名それぞれが、異文化体験・異文化接触の経験をもっていた。日本語ボランティアたちは、自分の知識や能力を、外国人の日本語学習を支援するという形で還元したいという「『恩』返しの循環」(新庄・西口,2007p.63)の意識をもって活動を行っていた。そして、共に生きやすい国・社会にするという大きなテーマを意識しつつも、自身ができる小さな支援を続けていることがわかった。筆者は、質問紙調査の回答結果を受け、S さんをライフストーリーインタビューの調査対象者に選んだ。その理由は、S さんの異文化での豊かな経験が S さんの価値観を涵養し、それが現在の日本語支援活動に影響を与えているだろうと考えられたため、また、S さんは、ボランティア活動の経験を通して、地域社会における「生活者としての外国人」のニーズや、それに対する日本語教育、更に、今後のボランティア活動に対するシステム作りにまで視野が及んでいたためである。

第５章　ライフストーリーインタビュー

この章ではライフストーリーの語りから抽出した、S さんの異文化経験と意味づけ、意味づけから得られた日本語支援活動との関係性を３つの期間に分類して提示した(5.3)。次に、S さんが日本語ボランティア活動を開始してからの経験とその意味づけ、日本語支援活動における態度との関係性をまとめた。これらを踏まえ、実際の日本語支援活動において、S さんが、どのような態度を表しているのか、補足データを得るための参与観察を行い、以下の具体的な態度データを抽出した(5.4.3)

a.参加者に寄り添う(参加者の文化や宗教などの背景/傾聴力)

b.教室活動への準備と責任をもつ　　c.笑顔・楽しんで教える

d.参加者が社会で上手く生きられるように必要なことを、参加者の使用言語で説明する。

e.教室活動外でもつながりをもち、支援する / f.メンタル面へのサポート

g.対話と協働学習の場づくり(参与観察にて確認)

第６章 総合考察

6.1 RQ への回答

質問紙調査の考察から、RQ1 の回答を「『共に生きやすい国・社会にするという』大きなテーマを意識しながら、目の前の外国人参加者に寄り添い理解すること、また、自身が

できる支援活動を『恩返し』の還元として行うという自発的、かつ、主体的なボランティア観である」とした。続いてＳさんへのライフストーリーインタビューの考察から、RQ2の回答を「長い海外での生活において、異文化接触の度に、自身の価値観と向き合い、それを変容させながら、少しずつ他者との信頼関係を構築してきたという豊かな経験から醸成されたもの」とした。そして、参与観察の考察から、RQ3の回答は「参加者のそれぞれを一個人としてみようとする態度」の他、上述した態度(a.～g.)とした。

6.2 トライアンギュレーションによる考察

ここではＳさんの質問紙回答、ライフストーリーインタビュー、および、日本語支援活動への参与観察からあらためて考察を行った。トライアンギュレーションの考察で明らかになったことは、⑴ Ｓさんは「異文化対応能力」(太田 2006,p.32)が高い。⑵ Ｓさんは、日本語支援活動において「日本人と外国人」「講師と学習者」という関係よりも、「個人と個人の信頼関係」に重きを置いているという、２点をあげた。「異文化対応能力」とは、「多文化化、グローバル化が進む社会において、異文化を持つ他者と相互理解をはかり関係性を構築する能力」であり(太田 2006,P.32)、Ｓさんが 13 年半もの間、異文化に身を置いてきた豊富な経験から獲得された能力である。中でも、Ｓさんが異文化のコミュニティーの中で、人びととの信頼関係を徐々に構築していったプロセスに、コミュニケーションと、関係構築のための「ことば」の必要性を意識し、相手のことば(相手の母語)を尊重して話すように努めたことは注目すべきである。そして、⑵は、このような経験のプロセスから涵養された価値観だといえる。

6.3 日本語学習支援者に望まれる具体的なボランティアの「態度」の例

Ｓさんの実際の日本語支援活動における認知的、非認知的態度(RQ.3 の回答)を、「日本語教育人材の養成・研修の在り方について(報告)」改訂版(2019 年)において提示された日本語学習支援者に望まれる「態度」項目と照らし合わせてみた。Ｓさんのもつ日本語ボランティアとしての望ましい態度は、文化庁が提示する「報告書」の項目である日本語学習支援者の望ましい「態度」を具体的に言語化したものとして説明可能である。しかしながら、後者が短期間で養成可能としているのに対し、Ｓさんの態度は、決して短期間の養成講座で培われたものではなかったことは、Ｓさんのライフストーリーの語りを考察した RQ.2 の回答からも明らかである。

7. 結論

態度とは、経験によって養われた価値観の上に醸成される内発的なものである。日本語ボランティアの態度は、支援活動を継続していく中で変容していくものではないかと考える。加えて、日本語ボランティアだけでなく、活動するコミュニティーの参加者同士が、他者を理解し、お互いの価値体系に影響を与え、態度を醸成していくことで、コミュニティがうまく機能し、成長していくことに繋がっていくものではないだろうか。よって、筆者は、態度は養成されるものではないとした。行政や団体組織が、日本語学習支援者の望ましい「態度」を活動開始前に養成するという視点を広げると同時に、活動の途中でも、日本語ボランティアたちが、互いに、人生や活動の経験から意味づけを共有し、解釈し、時には新たに捉え直すことで、態度を自ら培っていけるような機会を提供することが必要だと考える。

7.3 本研究の意義と限界

本研究では、豊かな知見を持つ日本語ボランティアのライフストーリーの語りから、日本語支援活動でのボランティアの態度が、異文化における経験から醸成されたものであることを、明らかにした。「態度」は、これまで伝統的に重視されてきた知識や、認知的スキルに加えて、社会・情動性スキルや価値観と並ぶ重要な「21 世紀型スキル」と強調されており(白井 2020)、今後も我々が備えていくのに必要な能力の一つである。本論で述べた調査対象者が示した態度は、あくまでも調査対象者が経験した価値観によって醸成されたという文脈に埋め込まれおり、それゆえ、そのプロセスを了解可能なものとして記述することを目指した。また、筆者が所属する NPO の日本語ボランティアのボランティア観や態度データを抽出して考察したため、他の団体や組織で支援活動を行っている日本語ボランティアの、ボランティア観や、その態度についての調査までは及んでいない。筆者はボランティアが活動経験を重ねる中で、自身の価値観や態度を醸成していくことができるような環境作りに視点を広げる必要性を述べたが、その具体的な手段や内容については、筆者の今後の実践課題となる。しかしながら、豊かな経験をもつ、たった 1 名の日本語ボランティアのライフストーリーが、「報告書」で定義された「態度」の意味そのものを問い直すきっかけとなり、一人の人間が人生を生きる「態度」、人と向き合う「態度」として捉え直すことができたのは、大きな気づきであり、学びである。

参考文献

足立祐子・松岡洋子・ 安場淳・ 西口光一・宇佐美洋(2018)「『生活者としての外国人』への言語教育に携わる人材とはどうあるべきか ―その人材像・育成方法について再考する―」『2018 年度日本語教育学会春季大会予稿集』,pp.70-79.

飯野令子(2019)「日本語ボランティアと研究者が共に歩む地域日本語教育へ-ボランティア日本語教室の新たな価値を創造する-」『常磐大学人間科学部紀要 人間科学』(37)-1,pp.1-14.

池上摩希子(2007)「地域日本語教育という課題-理念から内容と方法に向けて- 」『早稲田大学日本語教育センター紀要』(20),pp.105-117 早稲田大学日本語教育研究センター.

太田裕子(2006)「理論と実践における『異文化間言語学習』の問題-オーストラリアにおける年少者日本語教育の事例から」『WEB 版リテラシーズ』(3),pp.65-78 くろしお出版.

桜井厚・小林多寿子(編)(2005)『ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門』せりか書房.

柴田謙治・原田正樹・名賀亨(編)(2010)「ボランティア論-『広がり』から『深まり』へ-」株式会社みらい.

白井俊(2020)「OECDEducation2030 プロジェクトが描く教育の未来-エージェンシー,資質,能力とカリキュラム-」ミネルヴァ書房.

新庄あいみ(2007)「地域日本語教育における二つの視点」『大阪大学言語文化学』(16),pp.127-139.

永田祐(2010)「ボランティアの可能性と展望」柴田謙治・原田正樹・名賀亨(編)「ボランティア論-『広がり』から『深まり』へ-」pp.214-235 株式会社みらい.

西山志保(2005)「ボランティア活動の論理 ボランタリズムとサブシステンス」東信堂.

文化審議会国語分科会(2019)「日本語教育人材の養成・研修の在り方について(報告)」改訂版 https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/kokugo/kokugo_70/pdf/r1414272_04.pdf(2023 年 6 月 12 日閲覧).

森本郁代・服部圭子(2011)「地域日本語支援活動の現場と社会をつなぐもの-日本語ボランティアの声から-」植田晃次・山下仁(編著)『「共生」の内実 批判的社会言語学からの問いかけ』新装版 三元社.

米勢治子(2006)「『地域日本語教室』の現状と相互学習の可能性」『名古屋市立大学大学院人間文化研究』(6),pp.105-119.